



愛媛県立医療技術大学広報誌

砥礪しれい

May
2024
vol.20



Contents

- 学長からのメッセージ 2
- 学部長／研究科長挨拶 3
- 教員の国際的な研究活動 4
- 国際交流の再開 8
- 大学の風景 10
- 愛媛県臨床検査技師会との連携活動 12
- 看護学科教員の活躍 13
- 大学院生の活動 14
- 令和5年度新任教員紹介 16
- 地域交流センター事業 18
- 図書館紹介 19
- インフォメーション
図書館利用案内・学年暦・編集後記 20

グローバル化に 大学はどう在るべきか

4年近く続いたコロナ禍もやっと終息の兆しが見え始め、海外との人的交流も従来の姿に戻りつつあります。本学はこれまで、学生諸君を感染から守ること、ならびに学外医療機関における実習の場での感染を防止することを最優先し、厳しい感染対策を講じてきました。しかし、新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、講義・実習またサークル活動などもほぼコロナ禍前の方針に戻しています。

新型コロナウイルス感染症パンデミックによって大きく影響を受けたことの一つに外国との対面交流が遮断されたことが挙げられます。本学は国際性溢れる大学を理念と目標の一つに掲げ、台湾の高雄医学大学と学生の相互派遣ならびに受け入れに関する大学間連携協定を締結しています。コロナパンデミックによって一旦中断されていた学生交流を昨年再開できたことは、本学にとってコロナ禍からの復活を象徴する出来事の一つとなりました。また初めて、台湾高雄医学大学からの短期留学生を受け入れたことは、本学教職員にとって大学の更なるグローバル化の推進に貴重な体験となりました。

若い時に海外の異文化の環境に身を置くという体験は、たとえ短期間であってもその後の人格形成に大きな影響を及ぼします。周りを取り巻く社会を見る目は大きく広がり、海外の若者との交流によっていろいろな価値観も様変わりすると思います。私自身も海外で数年間生活しましたが、その経験は今も私にとってかけがえのない貴重な財産になっています。学生諸君には、是非本学のこの制度を活用して、国際感覚を備えた医療人になって欲しいと願っています。

他方、若者は厳しい国際社会の現状にも目を向けなければなりません。国際社会の分断、国家間の対立は激しさを増し、ウクライナやパレスチナ自治区ガザでは毎日のように子供も含め多くの市民が犠牲になっています。平和な日本で暮らす若者こそが世界で生じているこのような紛争に問題意識を強く持つべきでしょう。グローバル化の波は今後医療界にも大きく押し寄せてくるでしょう。本学はこれからも、目まぐるしく変化する現代社会において、グローバル化の深化に適應できる医療人を育成してまいります。皆様には引き続き暖かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。



学長 安川 正貴
Masaki Yasukawa

大学20周年に寄せて

2024年は大変厳しい幕開けとなりました。能登半島地震により被災された方々には心からお見舞い申し上げます。このような災害のときには、様々な力の結集が求められますが、命と健康を守る私たち医療従事者にも、発災直後の救急対応から避難生活中的健康管理、また、こころのケア等、長期にわたって支援が期待されています。被災地からは遠く離れた砥部の地においても、被災者と現地の支援者に心を寄せ、ここでできる支援を行っていきたいと思います。

さて、このような心痛む幕開けとなった2024年ですが、本学は大学20周年を迎えました。2024年秋には大学20周年記念事業を開催する予定ですが、本学の歴史は短期大学を前身としていますので、いずれ、短期大学から数えての周年記念事業も行う予定としています。大学としましては、短期大学から2004年に移行し、2010年に法人化、2012年に助産学専攻科、2014年に大学院修士課程を設置して20歳を迎えました。大学院修了生はまだ55名ですが、そのうち8名が本学の教育の担い手として就業しています。この20年の間に本学の教育・研究を担う人材の育成につながったことは一番の成果と言えます。

また、令和元年には一体感の醸成と内外PRのため、学歌とマスコットキャラクター（イッピー・トッピー）を制作しました。学歌の作曲は作曲家・ピアニストの加藤昌則氏に依頼したのですが、作詞は教職員一同で紡ぎだしました。広く馴染んでもらうために毎日ランチタイムに校内放送で流れ、また、電話の保留音にも活用されています。お披露目に際しては、砥部町のご厚意で学歌を陶板画にし、体育館に設置していただきました。イッピーとトッピーは、「基礎ゼミ」という1年生の授業のなかから誕生しました。学生たちがデザインしたものにプロが手を加え、仕上げたものです。看護学科のキャラクターが「トッピー」、臨床検査学科のキャラクターが「イッピー」で、ともに1年から4年にかけて、卵から殻を破り、自立して未来へ羽ばたく様子を、鳥をモチーフとして表現しています。尻尾のハートは「四葉のクローバー」をモチーフとし、1枚1枚の葉が「希望」、「誠実」、「愛情・慈愛」、「幸運」を象徴しているという説から、

- 1年生は希望を持って入学し、
 - 2年生は誠実に取り組み、
 - 3年生は愛情・慈愛をもって人と関わり、
 - 4年生は幸運を掴み羽ばたく
- というストーリーが設定されています。

大学HPにはそれぞれの誕生日や性格、名前の由来も掲載しているので、是非、ご覧ください。大学はこれからも地域のニーズに応える大学として努力して参りますので、皆様のご理解とご支援を引き続き、よろしくお願い致します。



学部長
研究科長 中西 純子
Junko Nakanishi



教員の国際的な研究活動

北欧の福祉用具と「寝たきり老人のいる国」からの脱却

看護学科(地域・精神看護学講座)
准教授

窪田 静

Shizu Kubota

1988年、コペンハーゲン大学社会医学研究所の伊東敬文氏とジャーナリストの大熊由紀子氏から、「寝たきり老人のいない国・デンマークを日本は目指せるか!？」という“挑戦状”が届いたのは、それに応え得ると見込まれた研究者、ジャーナリスト、実践現場。在宅医療のパイオニアとして知られた私の前職場もその1つでした。組織上層部は現地視察の末、彼我の差の最たるところを「ふんだんに使われる福祉用具」と「家族が担わない介護」と看破。当時動き始めた「在宅介護支援センター」の役割提言として独自に福祉用具センターを（1992年）、「24時間巡回型訪問看護介護事業」は厚生省のモデル事業に採択され開始し始めました（1994年）。

デンマークのシステムを採り入れた福祉用具センターは私が責任者となり、試験輸入したデンマークの優れた福祉用具を含む4,000種の福祉用具を備え、用具選定と試用貸し出しを行いました。在宅ケアチームが発見した患者の潜在するニーズを実現するため、提供するケアで用具を使い、対象者を意識変容に導く方法をモデル化。リフトの給付制度創設や、介護保険の制度設計などに貢献。マスメディアや専門誌からの視察や取材、学会等での講演や出版、公の研究事業や企業との研究開発、公衆衛生院や大学での授業、多職種の教育・研修…様々な依頼に応えました。

一民間医療機関による社会実験でありながら、新しい技術とシステム創りに挑戦できたのは、デンマークでその道を築いた専門家に師事し、研修諸機関の仲間の応援をずっと得られたからです。「寝たきり老人のいない国」の専門職と日本人の自分達が、同じ魂を持っているという実感に支えられ続けました。国内諸財団の助成やノルウェー王国アドバイザーメンバー任命などの資金や人脈にも助けられました。主催講座

を受講された方々が、自身の地域や職場で頑張る姿に伴走できたことも大きな喜びでした。

本学赴任後は、福祉用具と縁の薄い看護技術の変革と学生の就職先である病院看護師の労働環境改善が課題になりました。在宅看護論立ち上げ時に関与させて頂けた本学は、日本で最初にリフトを教えた教育機関でしょう。しかし、四半世紀を経てもなお、リフトはおろか低摩擦素材のグローブやシートさえない実習先・就職先がほとんどなのが現状でした。「ノーリフティング（抱き上げない・引きずらない）ケア」が知識として広まっても、視野の狭い「医療安全」「感染対策」が労働衛生環境改善を阻んでいると気づかされ、再びデンマークに教えを請い、感染対策が万全の低摩擦布製品「スピラドゥ」が日本で使えるよう尽力しました（2016年～）。福祉用具専門職の選定するアワード三冠を取得したこの製品には、深部静脈血栓対策のための弾性ストッキング着用など、日本では諦められて多くの課題解決にも貢献させたいと思っています。



ナースステーションに設置されたスピラドゥのロールをカットするスタッフ

全ての病室に面移動型天井走行リフトがあり、抱え上げない移動が保障されている



スピラドゥ日本導入のための病院視察（2016～2018）

海外で「あるく・みる・きく」

看護学科(基礎教育講座)
講師

尾上 智子

Tomoko Onoe

20代の約半分を私はフィリピン共和国で過ごした。フィリピン大学ディリマン校での留学時代に山岳少数民族・カリंगा族の民族音楽の世界に魅了され、大学院進学以降はフィリピン地域研究や文化人類学研究の分野で、カリंगा族の社会における医療体系や人々の治療戦略について調査・研究を続けてきた。

ルソン島北部コルディエラ山脈の奥地にあるカリंगा州の村はまさに「秘境」である。首都マニラからは夜行バスとジープを乗り継いで20時間ほどかかる。私が滞在していた当時、調査地の村には電気もガスも水道も通っていなかった。調査ではカリंगा族のアシスタントと一緒に村々を訪ねて回るのだが、慣れない山歩きに不満をもらしてはアシスタントを困らせた。客員研究員としてフィリピン大学アジアセンターに在籍していた私は、山の生活が辛くなるとマニラへ下りて、アジアセンターの研究者と交流したり、山ではめったに口にできない肉料理をお腹いっぱい食べたりしてリフレッシュを図ったものだった。言葉や文化の違いに戸惑うことも多かったが、カリंगाでの経験は私の人生観や生き方を180度変えてくれた自慢の財産である。

ただ、私が研究の道を歩んでいくことを迷わなかったと言えば嘘になる。我々の学問分野では博士号取得後の「ポストドク問題」が深刻化していたから



ホームステイ先のお母さんの焼畑。急斜面は立っているのも難しい。(2005年、カリंगा州パシルにて)

である。博士後期課程に進むべきか悩んでいた頃、独立行政法人国際交流基金のフィリピン派遣に採用していただき、約1年間フィリピンで文化交流企画・運営の仕事に携わる機会に恵まれた。国際交流基金では、日系人組織での通訳・翻訳や日本のプロ和太鼓奏者の招待公演の運営業務にも携わったが、私の主要な業務は、日本で就労を予定している日系人を対象とした日本語と日本文化の研修であった。この研修では、第二次世界大戦前に日本からフィリピンへ移民した人々の子孫である日系3世の人たちと実に豊かな交流を持つことができた。彼らのおかげで、私はフィリピンの人々や文化の魅力を再認識し、フィリピン地域研究の世界へ戻る決意を固められたと思う。広大なマンゴー農園の中の小さな小さな研修センターで彼らと共に勉強に遊びに汗を流した日々は、この先もずっと忘れることはない。



州都と調査地の村をつなぐジープ。満席で、ジープの上やボンネットに乗せられることもしばしば。(2009年、カリंगा州パシルにて)



シャーマンの老婆が住む村へ続く吊り橋を渡る筆者。揺れが大きく、足が竦む。(2009年、カリंगा州パシルにて)

子宮内膜細胞診の国際標準化を目指して

臨床検査学科(生体情報学講座)
教授

則松 良明
Yoshiaki Norimatsu

世界的に肥満、糖尿病が増える中、子宮体がんの罹患率および死亡率が非常に上昇している現在、死亡率の抑制のためにも、より完成度の高い子宮内膜細胞診の実施と標準化が望まれています。

私たち日本の研究グループとともに、ギリシャ、イタリア、スイスなどの各研究グループが共同で2016年5月に横浜で開催された国際細胞学会において、世界標準となり得るベセスダスタイルの新しい子宮内膜細胞診報告システム「The Yokohama System for Reporting Directly Sampled Endometrial Cytology (TYS)」が提唱され、その成果は2018年、学術誌に発表されました(Diagnostic Cytopathology, 2018;46:400-412)。2019年の国際細胞学会(シドニー)では大会長より、子宮内膜細胞診標本での鏡検ワークショップを依頼され、30名の参加者とともに実施しました。

2022年、それらの研究成果を世界的な学術出版社であるSpringer Natureより、「The Yokohama System for Reporting Endometrial Cytology Definitions, Criteria, and Explanatory Notes」として出版(eBook, Softcover Book)しました。この本は婦人科細胞診、腫瘍学、病理学、および分子細胞病理学を含む8章251ページ、約230点の図表で構成され、子宮内膜細胞診検査における子宮内膜悪性腫瘍を分類および報告する

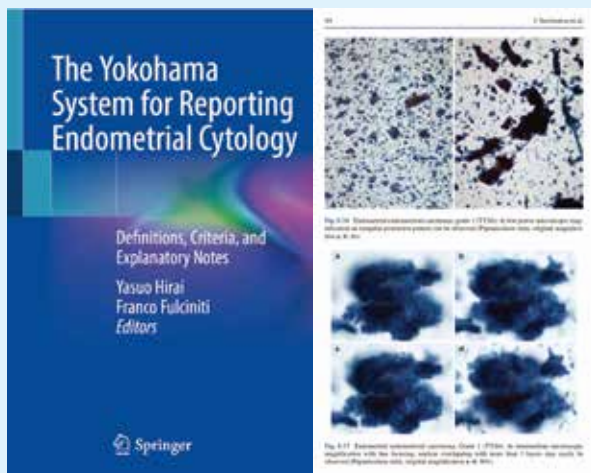
ための標準化された方法を提供するとともに、精度の高い診断に役立つ分子細胞病理学的技術についても解説しています。

子宮内膜がんは病気が子宮にとどまっている範囲で治療すれば80%以上の方は治ることが期待でき、早期発見のための子宮内膜細胞診検査は比較的簡単に受けられる検査です。

今後、ますますの子宮内膜細胞診の国際標準化を進めてまいりたいと思います。



2019-国際細胞学会
子宮内膜細胞診ワークショップ(シドニー)



インパクトある国際共同研究は親しい人間関係から

臨床検査学科(生体情報学講座)
特命教授

石田 也寸志

Yasushi Ishida

現在小児がん経験者の長期フォローアップ研究に関心を持っています。厚労省研究班で小児がんサバイバーの晩期合併症の実態調査と長期フォローアップの体制整備、早期介入による晩期合併症予防や軽減、情報収集を担当したことをきっかけに海外の研究者との交流や共同研究をする機会を持つことができました。

北米Childhood Cancer Survivor Study (CCSS)のOeffinger ご夫妻とは日本に特別講演でお招きした際に私たち夫婦とともに鎌倉観光をご一緒する機会に恵まれました。イギリスChildhood Cancer Survivor Study (BCCSS)のHawkins教授は、日本小児血液・がん学会学術総会の特別講演で来日された際に秋の鎌倉の紅葉を楽しみました。最近のヨーロッパの小児がんサバイバー研究は、PanCareというグループが仕切っていますが、その代表を務めるHjorth教授(スウェーデン)がやはり日本小児血液・がん学会学術総会で来日された際に箱根観光をご一緒しました。その後日本の小児がんサバイバーの懇親会に合流して楽しい1日をともに過ごしました。またPanCareの中心的存在であるHaupt教授(イタリア)とは、千葉での神経芽腫の国際会議で一緒になり、成育医療研究センターにご一緒したり、後日厚労省の研究班グループでGenova大学病院に招いていただきました。

アジアでは韓国のSeo教授が日本の学会にもよく参加されており、国際小児がん学会(SIOP)-Asiaや韓国血

液学会などに特別講演で招いていただきました。そのときにSeo教授のおられたAsan医科大学も訪問しましたが、総ベッド数2,715、1日の外来患者数1万人を超える空港のような巨大な病院でデパートが病院内にある驚くべき規模でした。病院内には教授専用のエレベーターがあり、上下関係の厳しさも垣間見えたが・・・。

このように世界の小児がんサバイバー研究者と個人的に親しくなり、観光に行ったり、大学に招いていただいたりしていく過程で、いくつかのインパクトのある共同研究にも参加することができました。その中には下記のようにJ Clin Oncolに掲載されたものもあります(最新のインパクトファクターは何と50.7)。国際共同研究をしたいのであれば、まずは親しい人間関係を築くことが大切であると痛感しています。皆様も海外の研究者とまずは仲良くなりませんか。

- Schmiegelow K et al: Second malignant neoplasms after treatment of childhood acute lymphoblastic leukemia. J Clin Oncol 31:2469-76, 2013
- Tonorezos ES et al: Models of Care for Survivors of Childhood Cancer From Across the Globe: Advancing Survivorship Care in the Next Decade. J Clin Oncol 36:2223-2230, 2018

国際交流
サバイバー
シップ研究



BCCSS代表のHawkins教授



PanCare代表のHjorth教授



韓国のSeo教授



PanCare PassportのHaupt教授



北米CCSSのOeffinger夫妻

国際交流再開

高雄医学大学からの短期交換留学生の受入れ

本学は、2018年6月に台湾の高雄医学大学と「学術交流に関する協定」を締結しました。協定に基づき、2019年3月に看護学科3年生2名と臨床検査学科2年生3名を高雄医学大学での短期海外研修に派遣しました。翌年には、2回目の短期海外研修への派遣および高雄医学大学から本学への短期交換留学生の受入れを計画していましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、中止に追い込まれてしまいました。その後3年間、COVID-19によって学生の派遣も留学生の受入れもできませんでしたでしたが、2023年度ようやく交流を再開することになりました。

2023年7月2日（日）から7月8日（土）の7日間、高雄医学大学看護学部の3年生を4名受け入れました。なお、愛媛大学医学部看護学科も同大学と協定を締結していることから、合同での受け入れとなりました。

受け入れの目的を『学生同士が交流すること』と定め、学生の中から国際交流委員やメンター（サポート役）を募集して、学内でのアクティビティーの企画・実施および学外でのアクティビティーにおける通訳やサポートなどを担当してもらいました。種々のアクティビティーを通して、本学学生と留学生とが大変良い交流をしました。



スケジュール

- 7月2日（日） 本学担当：松山城見学、砥部焼体験
- 7月3日（月） 本学担当：オリエンテーション、キャンパスツアー、助産院見学、学内アクティビティー、歓迎会
- 7月4日（火） 本学担当：愛南町地域医療見学ツアー
- 7月5日（水） 本学担当：愛南町地域医療見学ツアー
- 7月6日（木） 愛媛大学担当：講義「日本文化理解」、道後観光
- 7月7日（金） 愛媛大学担当：愛媛大学病院見学、看護学講義参加、送別会
- 7月8日（土） 愛媛大学担当：しまなみ海道ツアー、大街道夜市散策

松山城見学、砥部焼体験

4人の留学生は、7月1日（土）に高松空港着の飛行機で来日し、高速バスで松山までやってきました。

松山への到着が深夜だったにもかかわらず、7月2日（日）は朝から、4人のメンターの学生と一緒に松山市と砥部町の観光に出かけました。午前中は、滞在先のホテルから坊ちゃん列車に乗って、松山城の見学に行きました。午後からは砥部町に移動して、砥部焼のろくろと絵付けを体験しました。



キャンパスツアー

7月3日（月）に留学生が本学にやってきました。オリエンテーションの後、国際交流委員の学生が案内役となって実習室（基礎実習室、成人看護実習室、母性看護実習室）など学内を案内しました。案内役の学生に加え、看護学科3年生が簡単な実習を体験させてくれました。



助産院見学

午後は、まつやま助産院に見学に行きました。助産師という台湾にはない“お産”の文化に、留学生はとても興味をもったようで、同行した看護学科4年生のサポートを受けながら、熱心に学んでいました。



学内アクティビティー

助産院見学から戻り、学内でアクティビティーを行いました。国際交流委員の学生が中心となって企画し、折り紙と茶道の体験を実施しました。折り紙は、台湾の幼稚園や小学校でも行われているとのことで、新聞紙で折った兜が好評でした。茶道体験は、茶道部の学生が中心になって実施しました。



歓迎会

月曜日の最後には、歓迎会を開催しました。国際交流委員の学生が企画し、司会進行を含む全てが学生によって実施されました。学食を貸し切りにして、立食形式で開催し、吹奏楽団による歓迎曲の演奏や有志の学生によるけん玉のパフォーマンスも披露されました。50名余りの学生・教職員が参加して、留学生を盛大に歓迎しました。



愛南町地域医療見学ツアー

7月4日（火）と5日（水）は、1泊2日で愛南町へ地域医療の見学に行きました。本学看護学科4年生2名がサポート役として同行しました。愛南町国保一本松病院の副院長で、本学の臨床教授である嶋本純也先生に地域医療の現場を案内していただきました。出張診療所での診療の見学や訪問診療への同行、保健センターおよびグループホームの回診への同行、南宇和病院の見学、地域医療についてのレクチャーなど盛りだくさんの体験を通じて、日本の地域医療の現状を学びました。



大学の風景

EPU Festival 「MOREnjoy」

新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のため、規模を縮小して開催してきた学生祭ですが、ついに地域住民の方にもご参加いただける通常開催となりました。令和5年度の学生祭は、学校生活がより楽しい思い出となるように、そして社会全体もよりenjoyできるようなものになるようにという思いを込め、「MOREnjoy」というテーマを掲げ、学生祭実行委員会の学生が中心となって、企画・運営をしました。

ステージ企画では、各サークルの演奏会やパフォーマンスが次々と披露され、生き生きとした学生の笑顔がたくさん見られました。多くの笑顔あふれる学生祭となり、大学本来の姿を徐々に取り戻しているように感じました。

当日は、多数の学生の友人・家族、地域住民の方にご参加いただき、ありがとうございました。



オープンキャンパスの開催

学部対象（8月16～18日、10月21～22日）と助産専攻科対象（8月21日）のオープンキャンパスを実施しました。学部・専攻科の説明、実習室等の見学（キャンパスツアー）、在校生への質問コーナー、個別相談を行いました。学生祭と同日開催となった10月のオープンキャンパスでは、スタンプラリー方式のキャンパスツアーを実施しました。高校生・保護者の皆さんに大学校内を自由に見学していただくことができましたと思います。実習室に待機している在校生と沢山交流もできたようで、大好評の企画となりました。

短い時間だったため、話し足りないこと、伝え足りないこともあったかと思いますが、学生スタッフの協力のもと、すべての企画を実施することができました。



ビブリオバトル（四国ブロック）優勝&準優勝（臨床検査学科1年 石崎 杏香さん、谷次華乃さん）

この度、校内のビブリオバトルにて多くの方に私たちの発表を選んで頂き、四国ブロックへ出場することができました。本を読むことの楽しさやその本の魅力をもっとたくさんの方に知って頂きたいと思い、出場を決意しました。限られた時間のなかで、いかに本の内容を簡潔に話すか、興味を持って頂けるように話すかといった点について、試行錯誤しました。

発表当日は、他校の方もいらっしゃる中だったこともあってとても緊張しましたが、真剣に耳を傾けてくださったので、自分が話したいことを最大限伝えることが出来たと思います。満足できるような結果を残すことが出来て、「自分のことを」とも誇りに思います。

私たちの紹介した本は図書館にありますので、ぜひ手に取って読んでみてください。



臨床検査学科1年 谷次 華乃さん、石崎 杏香さん

第12回とべ動物園写真コンクール入選（臨床検査学科3年 羽藤 彰悟さん）

「第12回とべ動物園写真コンクール」に応募し、入選に選んでいただけました。令和5年2月から趣味として写真を撮り始め、今回コンクールに初めて応募したにもかかわらず、このような賞をいただけたことを非常に嬉しく思います。

写真を撮るようになって、日常の何気ない風景が以前よりもよく見えると感じる機会が増えました。それと同時に、長いようで短い大学生活という忘れたくない時間を写真に残しておきたいと思うようになりました。そこで今年度より学内で写真サークル（Photoxic）を立ち上げて活動を始めました。

この活動を通して、初めて出会う景色や関わりを持つ人が増え、以前にも増して大学生活が充実したものになりました。これからも大切にしたい瞬間や人の心を動かせるような写真を撮っていきたいと思います。



臨床検査学科3年 羽藤 彰悟さん



コンクール入選作品

愛媛県臨床検査技師会との連携活動

「タスク・シフト/シェアに関する講習会」の開催

第204回通常国会において、「良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保を推進するための医療法等の一部を改正する法律(令和3年法律第49号)」が成立されました。その中で、臨床検査技師等に関する法律の一部が改正され、臨床検査技師が行える業務が一部拡大しました。

愛媛県臨床検査技師会のご協力のもと、臨床検査学科3年生を対象に「静脈路確保」や「検査目的の気管カニューレ内部からの喀痰吸引」などの項目について講習会が実施されました。



内視鏡用生検鉗子を用いて消化管病変の組織を採取する様子



気管カニューレから喀痰を採取する様子

「キッズジョブまつやま」「検査と健康展 in エミフルMASAKI」への参加

本年度も愛媛県臨床検査技師会に関連するイベントに多数の学生が参加させていただきました。

「キッズジョブまつやま2023」では、小学生を対象に臨床検査技師の仕事体験のサポートをしました。超音波検査や血液塗抹標本の観察をしてもらいましたが、小学生たちが教科書やアニメで得た知識を私たちに教えてくれることも多く、臨床検査を学ぶ自分自身のモチベーションにも繋がりました。

「検査と健康展」では、簡易ヘモグロビン測定や肌年齢の検査など日々の健康にかかわる検査を通して、臨床検査技師の広報を行いました。一般のお客様にわかりやすく説明する大切さを実感できる貴重な機会となりました。



イベント当日は、たくさんの方にお越しいただきました！



臨床検査技師の皆さんのご指導のもと、お客様の対応をしている様子

看護学科教員の活動報告

「健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰」(母性・小児看護学講座 特命教授 豊田ゆかり)

令和5年11月9日(木)に栃木県総合文化センターで開催された健やか親子21全国大会において、健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰を頂きました。

これは、令和5年4月に新しくできたこども家庭庁が、成育過程にある者の心身の健やかな成育並びに妊産婦の健康の保持及び増進に寄与する取組を推進している個人・団体・自治体・企業を対象とした表彰でした。

この表彰は、私個人に言うより、これまでに一緒に活動させていただいた地域の保健師及び関係機関の皆様、大学教員の仲間と共にいただいたものと思っています。皆様に感謝申し上げます。

さらにうれしかったことに、本会において本学卒業生の3名の保健師が、母子保健活動において表彰を頂きました。恩賜財団母子愛育会会長表彰山口美晴さん、日本家族計画協会会長表彰高田美紀さん、母子保健推進会議会長表彰権田恭子さんです。卒業生の活躍をととても頼もしくも感じました。

地域の活動は一人だけでは広げることが難しく子育て支援を担う専門職と地域の人々と共に築き上げ、充実・発展していくものと考えます。今後も後に続く仲間の活躍を期待したいと思います。ありがとうございました。



「令和5年度 日本看護協会会長表彰」を受けて (基礎看護学講座 教授 野本百合子)

このたび、日本看護協会から会長表彰の栄誉にあずかり、身に余る光栄と感じております。私は、大学卒業直後に看護師として職業生活をスタートした1982年5月、日本看護協会会員となりました。あれから40年余り。入会当初は、自身の仕事さえままたず、看護界への貢献などを考える余裕は全くありませんでした。少しずつできることが増え、先達の大きな力に支えられ、導かれてきたことに気づき、私にも、後を継いでくださる看護職の皆様に向けて、何かできることをしたいと考えるようになりました。そして、愛媛県看護協会委員の役割をいただき、様々な活動に取り組み、気づけば12年間が経過していました。はじまりの一步から私を導き、育ててくださった先輩看護職の皆様への恩送りとなりますよう、これからの残る人生、できることを精一杯、続けていきたいと思うと共に、少しでもお役に立ちたいと願っています。これまで支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



大学院生の活動

成人看護学領域の授業内容（看護学専攻）

成人看護学領域では、成人期にある人を対象に、急性期・慢性期を問わず、病いや治療とともに生きることを支える看護を探究しています。成人看護学特論Ⅰ・Ⅱでは慢性・急性の状態にある人の特性を理解するための重要な概念や理論の理解を深め、慢性期や急性期の健康課題に対してエビデンスに基づいたアプローチ方法や看護支援の開発等について学修します。また、成人看護学演習では、特論で学修した概念や理論をもとに、研究に結びつけることができるように学修していきます。さらに成人看護学特論Ⅲでは、がん看護学に関する理論や概念をもとに実践してきた看護を意味づけながら理解を深めています。特に成人看護学特論Ⅲは、がん看護に興味関心がある院生たちが履修していて、さまざまな考え方や経験に触れる機会やがん看護専門看護師とも学び合える時間があり、学ぶ楽しさを感じているようです。



大学院生からのメッセージ

大学院で様々な看護職の方々と一緒に学ぶことでこれまで知ることのできなかつた考え方を知り、幅広い視野を持ち、多角的に看護を捉えることができるようになりました。また日々の講義で現場での看護実践を共有し、意味づけしあうことで院生同士お互いを高めることができます。

修士学位論文発表会

2024年1月27日に「令和5年度修士学位論文発表会」が開催されました。本年度は、7名（看護学専攻6名、医療技術科学専攻1名）の修了予定者がこれまでの研究について発表を行い、審査員や教員からの質問を受けていました。教員に加えて、修士課程に在籍している大学院生や修了生の参加も見受けられ、会場は大盛況でした。

発表された皆さん、発表おつかれさまでした！皆さんの今後のさらなる研究活動を応援しています！



令和5年度 愛媛県臨床検査学会

2023年6月18日、本学にて令和5年度 愛媛県臨床検査学会が開催されました。愛媛県内で勤務する臨床検査技師の皆さまが発表されるなか、大学院の医療技術科学専攻2名と学部生1名が研究発表を行いました。3名とも初めての学会発表で、とても緊張した面持ちでしたが、それぞれの研究テーマについて発表することができていました。



医療技術科学専攻1年 小田千寛さん



臨床検査学科3年 三戸彩寧さん

第56回 日本臨床衛生検査技師会中四国支部医学検査学会

2023年9月16、17日に開催された令和5年度 日本臨床衛生検査技師会中四国支部 医学検査学会「学生フォーラムB」にて、大学院生3名が研究発表を行いました。発表後の質疑応答の時間では、自分たちの研究テーマについて積極的に討論をしていました。他大学の院生・学生が発表する姿も多く見られ、活発な学生フォーラムの場となりました。

当日の運営には、学部生がボランティアとして参加し、会場運営のお手伝いをさせていただいたり、先輩の発表を見学したりと貴重な機会に恵まれました。



医療技術科学専攻1年 近藤ゆめのさん



医療技術科学専攻1年 水口ももさん

令和5年度 新任教員紹介

看護学科

石川 桂 助教

母性・小児看護学講座

Kei Ishikawa



母性・小児看護学講座に着任しました石川桂です。本学を卒業後、看護師として大学病院の新生児集中治療室（NICU）で勤務し、その後、大学院の進学と同時に回復期リハビリテーションに特化した病院で勤務しました。看護師での経験や大学院で学んだことから地域で生活する人々の健康を支えたいと考え、町の保健師として勤務しました。看護師と保健師を経験して“顔の見える関係”は、人と関わる上で基盤になることだと学びました。大学院の頃から「在宅で生活する医療的ケア児を育てる親」を対象とした研究に取り組んでいます。

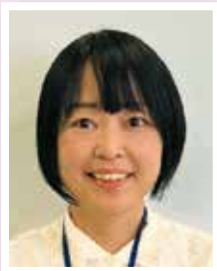
私は学部生のときに受けた講義をきっかけに看護教員になりたいという夢を抱いていたため、本学の教員として着任できたことを大変嬉しく思います。専門職として実践してきた経験やフットワークの軽さを少しでも教育や研究に活かしていけるよう、尽力したいと思います。また、学生の皆さんと小児看護学の講義や実習、研究について一緒に学んでいけることを楽しみにしています。これからよろしくお願ひします。

看護学科

仲田 由美 助教

成人・老年看護学講座

Yumi Nakata



成人・老年看護学講座に着任しました仲田由美です。私は、愛媛県立医療技術短期大学を卒業後、愛媛県立中央病院で21年間看護師として働き、この度、母校である本学に着任しました。外来での経験が長く、一人一人の出会いを大切に、患者さんの生き抜く強さや思いをつなぐ看護を心掛けていました。

教員となってからは、人に伝えることの難しさを実感しながらも、成長していく学生の姿を目にすることで、やりがいも感じています。特に病院実習では、学生の経験したことから一緒に看護を考え、一つ一つ課題を乗り越える過程を通して、看護師として働いていた時には気が付かなかった新たな発見もあり、教育の楽しさも感じています。これからも、学生が看護の楽しさを感じられるよう、一緒に学び成長していきたいと思ひます。

今までどの環境の違いに、戸惑いや不安を感じることもありましたが、たくさんの方々に支えられ感謝しています。教員としてまだまだ未熟ですが、未来の看護師を育て、少しでも看護に貢献できるよう日々精進していきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

看護学科

和泉 千恵子 助教

母性・小児看護学講座

Chieko Izumi



令和5年7月1日に母性・小児看護学講座に着任しました和泉千恵子です。これまで、主に他県で助産師として勤務経験を積んできました。総合病院での臨床現場において多様な背景の母子の健康をサポートするなかで、文化的マイノリティーの対象への援助をする機会が何度かあり、異なった文化的背景をもつ対象との関わりについて学びを深めたいと思ひ、大学院留学をしました。大学院ではそのような対象への母子保健における医療者の役割に焦点を当てた研究を行いました。

20年以上愛媛県から離れていて戻ってみると、以前とは違う状況になっていることを様々な場面で感じるがあります。教育という新たな現場で、これまでの経験を活かしつつ地域活動、教育、研究に貢献できるよう尽力したいと考えています。よろしくお願ひいたします。

河野 瑠奈 特定教員

地域・精神看護学講座

Runa Kono



令和5年4月より地域・精神看護学講座に着任いたしました河野瑠奈と申します。本学の看護学科を卒業後、保健師として県内の保健センターに勤務していました。地域住民のつながりや相互扶助に関心があり、就職後は社会人学生として本学の修士課程に進みました。修士課程では、地域の若い世代に焦点をあてた研究に取り組んでいます。

この大学で学び、先生方や友人たちと出会えたことが、私の保健師としての基礎を築き、人生における大切な財産になっていると感じています。ご縁あって、教員として本学に戻れたことに感謝しています。今後も、愛媛県の地域看護に微力ながら貢献できるよう精進して参りたいです。学生の皆さんと共に地域看護への学びを深め、切磋琢磨できることを楽しみにしています。

石田 也寸志 特命教授

生体情報学講座

Yasushi Ishida



2023（令和5）年4月1日付で、特命教授として着任しました。1983年に愛媛大学医学部卒、卒後小児科を専攻し、国立がんセンターで研修を受け、基礎研究としては抗癌剤薬剤耐性の研究、臨床では造血幹細胞移植を学び、その後小児がんの臨床に約40年間取り組みました。私のこれまでの中心的研究テーマは、“小児がんの治療成績とQOLの向上”であり、小児患者・家族のQOL研究と小児がんサバイバーの晩期合併症の実態調査と長期フォローアップの体制整備、早期介入による晩期合併症予防や軽減、情報収集と発信を行ってきました。2022年度からはAMED研究として日本でも大規模コホートレジストリーの構築を目指すことになり、それを利用した二次がん調査ワーキンググループの研究代表者になったことから、本学でも引き続きその研究に取り組みたいと考えていますのでよろしくお願いいたします。

田野 ゆづき 助教

基礎検査学講座

Yuzuki Tano



令和5年4月1日付で臨床検査学科基礎検査学講座に着任いたしました田野ゆづきと申します。本学の臨床検査学科を卒業後、4年間病院で臨床検査技師として働いていました。現場では生化学、血液一般、尿一般、生理機能など様々な検査を経験し、医療における臨床検査の重要性を実感しました。

就職して3年目に本学大学院に入学して働きながら大学院に通い、令和5年に修士号を取得しました。修士課程から山田武司教授のもとでCD8陽性T細胞についての研究を行っています。

こうして教員として母校である医技大に帰ってくるようになることは夢にも思っておらず、非常に感慨深い思いです。また、臨床検査学科では初めての卒業生の教員ということで、卒業生だからこそ母校のためにできることは何なのか日々模索しています。まだまだ未熟者ではありますが、現場での経験を活かしながら教育にも研究にも尽力したいと考えています。よろしくお願いいたします。

地域に開かれた大学づくり 地域交流センター (EPU-Local Community Center) 事業

地域交流センターは、2004（平成16）年の開学以来、地域と大学を結びつける活動を継続しています。このような活動は、県内の保健・医療・福祉の質向上を通して、県民や地域住民の健康を維持・増進に貢献することを目指しています。実際には、下に示した4つの機能を発揮するために、様々な事業を展開しています。

地域交流センターの機能と各種事業

機能		事業名
人材育成	専門職	愛媛県看護教員継続教育研修
		「多文化共生時代の医療コミュニケーション」セミナー
		愛媛県アルコール健康障害対策関係者会議
	一般・学生	ホームカミングデー
		えひめ高校生生体機能研究プログラム
		子ども科学教室
調査研究	ゲートキーパー育成事業	
相談支援	思春期保健スキルアップセミナー	
情報発信	臨床看護研究相談室／自主研究会・研修会の支援	
	ホームページ・広報誌への発信／活動報告書の発刊 地域貢献グッズの貸し出し 他	

令和5年度活動実績

「多文化共生時代の医療コミュニケーション」 セミナー

大阪大学 宮原暁教授と外国人住民の方々を講師・ゲストに招き、医療職者にとって今後大きな課題となり得る異なる言語・文化を有する人々とのコミュニケーション方法を学ぶ機会としました。



ねりんピック愛媛のえひめ2023 スポーツウエルネス吹矢交流大会への協力

砥部町との連携協定により、教員が大会実行委員を務めるとともに、学生ボランティアが大会の催し物である「健康づくり教室」の運営を行いました。





図書館紹介

専門員(図書館司書) 泉 浩
Hiroshi Izumi

昨年度より導入した電子ブックは現在57冊(令和5年12月現在)あり、看護学・臨床検査学・助産学の教育や研究に利用できるものが増えています。「Maruzen eBOOK Library」「KinoDen」「メディカルオンライン」と3つのプラットフォームから電子ブックを利用でき、アカウントを作成すると学外でも利用できますので、自宅や実習先からも電子ブックを閲覧でき便利です。

国試2週間前から土曜日・日曜日は8:40~21:00の通常時間で開館しており、試験対策として自習に丸1日図書館を利用できるようになりました。同期間は学外の方も自習はできませんが、資料の貸出・返却などの図書館利用が可能です。

館内外のブースでは、今年度も他機関との連携による展示を推進しています。えひめリトルレインボーと連携した「リトルベビー写真展"赤ちゃんの小さなキセキのストーリー"」では、早産児の方の写真や早産児用おむつなどを展示し、坂村真民記念館と連携した「坂村真民の生き方と詩の魅力」では、坂村真民の代表的な詩を展示しました。博物館をはじめ各機関と連携し、趣向を凝らした展示を今後も続ける予定で、図書館の可能性を広げていきたいと思ひます。



リトルベビー写真展



坂村真民の生き方と詩の魅力

Information

【インフォメーション】

図書館利用案内《学外の方の利用案内》



利用時間	平日/8:40~21:00 土曜日/8:40~17:30
図書借出	借出冊数と期間は、5冊2週間です。
資料宅配サービス	送料をご負担いただきご自宅に希望の資料をお送りします。
電子リソース	データベース、電子ジャーナル、電子ブックを利用できます（一部利用できないものあり）。 1枚10円でプリントアウトも可能です。 【利用可能な電子リソース（一部）】 ・医央誌 Web ・最新看護索引 Web ・メディカルオンライン ・国立国会図書館デジタルコレクション ・SCIENCE ・MEDLINE with Fulltext ・CINAHL with Fulltext ・Maruzen eBOOK Library
公衆無線 LAN	持ち込み用PCやタブレットでインターネットに接続できます。
S N S	図書館 facebook https://www.facebook.com/EhimePULib/ 図書館 X https://twitter.com/EhimePULib

令和6年度 学年暦(予定)

●春季休業日 ……………～3月31日	●大学院入試（一般入試・社会人特別選抜入試）… 9月7日
●ガイダンス等 ……………4月1日～3日	●後期授業 ……………10月1日～2月3日
●入学式 ……………4月3日	●大学院医療技術科学専攻オープンキャンパス(第2回)… 10月上旬
●進路セミナー（第1回）(講演) ……………4月3日午後(3・4年生)	●防災訓練 ……………10月18日2時限
●前期授業 ……………4月4日～7月26日	●学生祭「EPU Festival」…10月19日～20日
●健康診断 ……………4月12日午前	●第2回オープンキャンパス ……………10月19日～20日
●新入生オリエンテーション ……………4月12日午後	●学部 学校推薦型選抜入試 ……………11月16日
●交通安全講習会 ……………4月25日午前	●学部 社会人特別選抜入試 ……………11月16日
●進路セミナー（第2回）(職業紹介) ……4月25日午後(3・4年生)	●助産学専攻科入試 ……………11月17日
●内科検診 ……………5月18日午後・25日午後	●冬季休業日 ……………12月26日～1月4日
●大学院医療技術科学専攻オープンキャンパス(第1回) …6月中旬	●大学入学共通テスト ……………1月18日～19日
●開学記念日 ……………6月20日	●後期試験 ……………2月4日～10日
●ホームカミングデー ……………6月22日	●学部 一般選抜入試（前期日程） ……2月25日～26日
●大学院看護学専攻オープンキャンパス …7月13日	●学部 私費外国人留学生特別選抜入試 …2月25日
●前期試験 ……………7月29日～8月2日	●再試験期間 ……………2月27日～3月5日
●夏季休業日 ……………8月7日～9月30日	●学部 一般選抜入試（後期日程） ……3月12日
●助産学専攻科の夏季休業日 ……………(8月5日～8月23日)	●卒業式・修了式 ……………3月19日
●第1回オープンキャンパス ……………8月9日～10日	●春季休業日 ……………3月21日～
●助産学専攻科オープンキャンパス ……8月16日	
●再試験期間 ……………8月19日～23日	

日程など詳細は大学ホームページをご参照ください。 <https://www.epu.ac.jp/campus/calendar/index.html>

広報誌「砥礪(しれい)」についての意味

『砥礪(しれい)』とは、「①砥石(といし)②とぎみがくこと」とあり、さらに「学問、修養などを高めようと努力すること【大辞泉：小学館】」などの意味があります。平成16年に大学が開学して1年経った平成17年に、本学の位置する砥部町にちなむとともに、大学広報誌の名称としてふさわしいということで多くの賛同を得て決定された経緯があります。

公立大学法人 愛媛県立医療技術大学

〒791-2101 愛媛県伊予郡砥部町高尾田543番地
TEL 089-958-2111 FAX 089-958-2177
ホームページ <https://www.epu.ac.jp/>



編集後記

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、授業、実習、学食、オープンキャンパスや学生祭 EPU Festival... 本来あるべき大学の姿が戻りつつあります。そんな、コロナ禍からリハビリテートする大学の姿を、砥礪20号は映しています。

特に焦点を当てたのは、「国際交流」です。高雄医学大学からの短期交換留学生の受入れの実現を、しっかりレポートしていただきました。グローバル化を推進しようとした矢先に見送らざるを得なかった計画でしたが、愛媛大学との連携という果実も伴う形となりました。また、普段なかなか伺うことのできない、教員の国際的な活動も大きく特集し、彩り豊かなページとなりました。

「大学の風景」「大学院生の活動/大学院風景」の中には、取り戻した日々での、学生、院生と教員の邁進する活躍が描かれています。

最後になりましたが、お忙しいなか、原稿をお寄せいただきました皆様に、心から感謝申し上げます。

広報委員会一同